

サルナシ(*Actinidia arguta* Planch)の栽培特性

誌名	山梨県森林総合研究所研究報告
ISSN	13430106
著者名	戸澤,一宏
発行元	山梨県森林総合研究所
巻/号	26号
掲載ページ	p. 9-11
発行年月	2007年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



サルナシ (*Actinidia arguta* Planch) の栽培特性

戸澤一宏

Cultivation characteristics method of *Actinidia arguta* Planch
All processes from the transplant to the harvest

Kazuhiro TOZAWA

Summary : *Actinidia arguta* Planch is on for food fruits and a special product thing promising as the raw material of the vine work. The cultivation method from cultivation method and the proliferation to the harvest of this Salnashi was established. It turned out the harvest to take about four years, and to be able to use after year fifth as a production goods.

要旨：サルナシ (*Actinidia arguta* Planch) は、果実が食用となり、また蔓細工の原料として有望な特産物である。このサルナシの栽培を検討し、増殖から収穫までの栽培法を確立した。収穫までには4年ほどかかり、5年目以降は生産品として利用できることが判明した。

1 はじめに

サルナシ (*Actinidia arguta* Planch) は、マタタビ科マタタビ属の雌雄異株性の蔓性の落葉樹である (Fig.1)。マタタビに似ているが花期に葉が白くならないのが相違点である。果実はマタタビと言うよりはむしろキウイフルーツの小型版で、熟すととても美味である。



Fig. 1 サルナシの果実

また、つるは丈夫で腐りにくく、扱いやすいため、蔓細工の材料として人気のあるものである。

サルナシの増殖法は戸澤 (2006) により報告されているが、サルナシの栽培方法として確立されているものは少ないため、サルナシの栽培法の確立を目的として、本研究を行う。

2 試験方法

2.1 サルナシの増殖と定植

サルナシは雌雄異株である。そのため、サルナシの増殖には種子を用いることは効率的ではない。そこで、増殖法には挿し木法を用いた。親株として、八ヶ岳薬用植物園に植栽してあり、過去に果実のついた株から挿し穂を採取した。

挿し木は3月20日に行い、鉢上げは6月10日、定植は梅雨明け前の7月1日に行った。

定植後の生存率を10月まで測定した。また、幹の伸長量の測定を行った。

2.2 サルナシの収穫

定植後、開花状況や収穫状況について調査を行った。
定植後5年間の開花・収量について検討した。

3 結 果

3.1 サルナシの増殖と定植

定植後の生存率について調査した結果を Table1 に示す。

Table 1 定植後生存率 (%)

定植株数	枯死株数	生存率
25	2	92.0

定植後の生存率は90%以上と非常に高く、挿し木による苗作りから定植作業までは容易である。

定植後のサルナシ20本の平均樹高の変化を Fig.2 に示す。

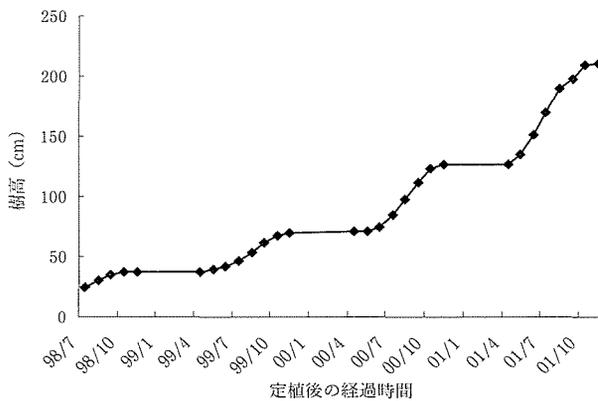


Fig. 2 サルナシの樹高の変化

Fig.2によると、定植後3年目から伸長量が増加した。同時に、20本の株のうち、12株で開花が見られた。

しかし、結実は見られなかった。4年目になるとサルナシはさらに成長し、結実が見られた。定植後の収穫量の変化を Table2、Fig.4、5 に示す。

Table 2 収穫量の推移

栽培年	1	2	3	4	5	6	7	8
1株あたり収穫量(個)	0.0	0.0	0.0	8.7	12.2	21.4	92.3	152.8
1株あたり収穫量(g)	0.0	0.0	0.0	28.7	41.5	79.2	332.3	550.1
1個あたり重量(g)	0.0	0.0	0.0	3.3	3.4	3.7	3.6	3.6



Fig. 3 サルナシの雄花

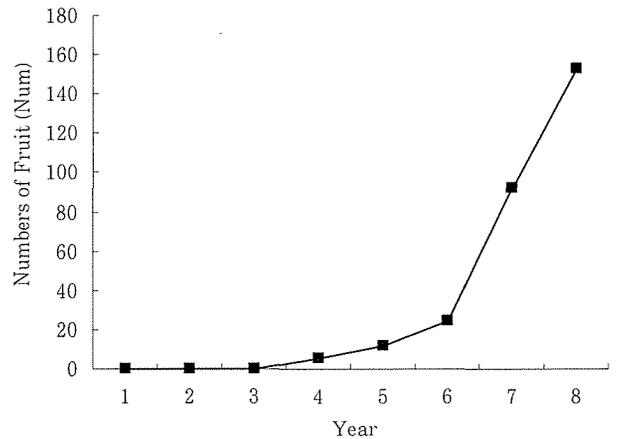


Fig. 4 サルナシ果実個数の経年変化

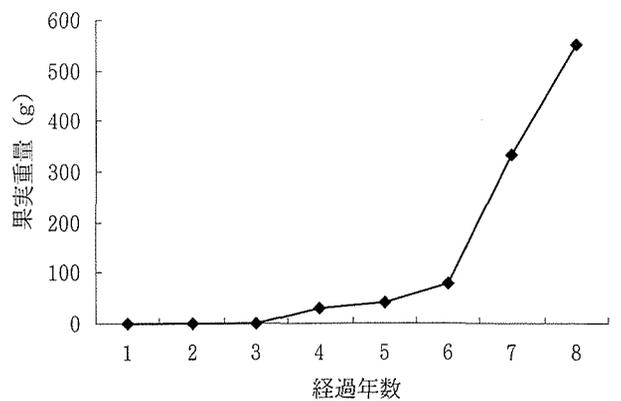


Fig. 5 サルナシ果実収穫量の経年変化

5年目以降は収穫も伸び、7年目以降はかなりの収穫が得られることが明らかとなった。

4 考 察

1. 挿し木により増殖したものを、栽培したところ、定植後の生存率は90%以上と高く、サルナシ栽培の標準的な方法として利用できることが判明した。
2. サルナシの伸長量は3年目を境に、成長が著しくよくなることが判明した。これは定植後のサルナシが定植環境に慣れたためと考えられる。
3. サルナシは定植後、早いもので3年目から開花が見られるが、結実するのは4年目、収穫量が増えるのは

6～7年目からであることが判明した。このようにサルナシの収穫が増えてくるのは7年目以降と時間がかかるため、他の作目と併せて栽培を行う事が、栽培上のリスクを減らす事と考えられる。

引用文献

- 1) 戸澤一宏：2006, サルナシ (*Actinidia arguta*) の増殖法の検討. 山梨県森林総合研究所研究報告, vol25, 139-142.